

論文審査結果の要旨

本論文については、博士論文公開審査会（令和5年2月21日、於稲盛記念会館会議室）において内容説明がなされ、その後質疑応答が行われた。公開審査会で提出された主な論点は、以下のとおりである。

①『萬葉集』研究の方法論の前提

②個別の考証における問題

- ・人麻呂個人の用例における用法の差異
- ・人麻呂と家持との文字表記の差異
- ・人麻呂の宮賞め歌の構造の継承と非継承
- ・仏教的概念の共有状況および仏典の流布状況
- ・漢詩の作詩状況の面における比較

③論文の論述方法・構成

内田氏の研究方法である、『萬葉集』歌を書記されたものとして扱うという方法は、これまでに多くの研究者によって行われてきたものであり、『萬葉集』における漢籍受容の研究において様々な成果を生み出してきたものである。本論文は『萬葉集』の表記（文字表現）と漢籍との関係について、これまでの成果を踏まえつつも、近年著しく有効な手段となった和歌・漢籍・仏典等の各種データベースを駆使して、これまでに明らかでなかった資料や、従来よりも有効な資料の発掘を進め、これまでにない関係性を明らかにしている。詩文、経書、史書、仏典など、非常に広範囲に及ぶ資料を博搜し、その内容を精査して『萬葉集』の表現の解明を試みるという方法論は、本論文で対象とした柿本人麻呂ばかりではなく、『萬葉集』の漢語表記全般にわたる問題解決に寄与するものであり、こういった方法論によって導き出された本論文の成果は、従来の研究を大きく更新するものとして高く評価できる。

また、柿本人麻呂一人に留まることなく、『萬葉集』の最終編纂者と目される大伴家持における人麻呂歌の継承と展開をも論じることで、人麻呂の漢籍受容のあり方、その歌の表記（文字表現）との関連性が『萬葉集』全体にどのように浸透し定着していったかという問題を究明する方法論が導かれるている。そういった意味においても、『萬葉集』における漢籍受容の研究における本論文の意義は大きいものがある。

一方、この方法論において忘れてはならない問題として、以下の二点が提起された。一つは、それぞれの歌が実際に歌われた場を想定しつつ、どのように書記されたもので、それがどのように享受されたものであったかという問題である。またもう一つは、本論文で対象とした柿本人麻呂が、当時日本に招来されていたであろうさまざまな漢籍を実際に関連してその内容を理解し、自らの歌の表記に応用できたということがどの程度想定可能なのかという問題である。これら二つの問いについては、本論文ではまだその問いへの解答の用意がない状態ではあったが、現時点では『萬葉集』研究者の誰もが明晰な答えを提示できていない、研究上の根本的か

つ重要な問題であることから、今後の研究を進める上で重要な課題とすべきことが指摘された。

審査会では、上記の論点以外に、個別の考証について、論旨や解釈等の確認が行われた。漢籍の解釈に若干の不備も指摘されたが、論旨を左右するものではないことが確かめられた。このほか、論述方法や構成の一部について改善を求める意見もあったが、参考資料として掲載された各種データについては、膨大な用例を緻密に検討した信頼性の高いものであり、本論文の論述に厚みを与えると同時に、『萬葉集』研究にも資するものと高く評価された。

以上のように一部課題も残すものの、本論文は、綿密な作業にもとづく実証的な方法論により、人麻呂や家持の文字表現と漢籍との関係を、従来よりも高い解像度で見通すことを可能にしている点で、『萬葉集』研究に大きく資するものであると認められ、本学における博士の学位授与の評価基準を満たしているものと判断される。よって本委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値することを認める。